



150
168
1

The image shows the front cover of an antique book. The binding is made of a dark blue, finely woven cloth. A small, rectangular red paper label is affixed to the upper right corner, containing the numbers '150', '168', and '1' stacked vertically. On the left edge, there is a vertical strip of light-colored, possibly leather or parchment, which appears worn and stained. The edges of the book are frayed, revealing the underlying board material. The book is set against a dark, textured background.

後名理魯之

延徳元年三月九日

たれ初点



家伝

何舟

曙や文乃外花巻登

月よりくしあなを司る

世のれよりいふは年を

雲よりいふは年を

海よりいふは年を

云よりいふは年を

将領の演説は凡

若根の心やあ乃下

ふわむすめを初に祇
すの乃の小枝わさ宣
神代るまあつくまゑた長
かすうぬへある小ぎ佐
れくまも君や息どか小載
ないくし涼藤多村存
ふのふはくし野末きと柏
いそをささいしかりん祇
月待いのころ宿者宣
あまたしあはれおぼえり長
い流のがちわらぬ病佐
あまたしつゆよきせば載
襖一日愛ひつらん櫛考
の命なりけり何とも柏
りよふて春さけり祇
微よりさる衣けり宣
まをさる後花の鳥長
あはれもやあらねば佐
まをしよふて人衆家載
楓の枝さる流るる名存
黒髪もしく年のみ柏
紫よりさるあ侍り祇
入るに山れしとせ宣
芳野れし花の鳥長

[illegible]

[illegible]

川佛のまゝつゝあまふた長
 らをまゝあまふた長
 曉にいふ時ら若く下載
 別りつゝあまふた長
 西市にわらふ方も柏
 あゝあまふた長
 らゝあまふた長
 何れあまふた長
 風といふもあまふた長
 まゝあまふた長
 おまゝあまふた長
 流るるあまふた長

[illegible]

有孝

勅點五句

長二

宋併穴

卷一

兼載

勅占六

宗傳五句

肖柏

勅造

宋律四

松丸二

合勅点元石

10

宗傳坊七句

何人

此種心敬

長年子方鳳の行

雲兮以製月餅每專

與馬廐志人

酒の書

儀し之る家之理

金志堂大和木之

今移す村に於て

朝芳

卷之六

竹の系統をいふ

有之
 聚
 子
 孫
 世
 月
 清

別之初也

何れいふ我中れふと著

猿の酒を飲む

上校方寸諸君如山石

鐘子期之琴

明は心をあすた寺に

閑の成麻のふ世乃心
 月さぬさく方その心
 かり廣枝のふ世乃心
 此より月んつる系も人
 重なりくとも心
 中下りる冬乃日
 狂つげふ時ぬし
 振袖のふ世乃心
 初風や好御のふ世
 馬々々々々々々々
 ようわいぬふ世乃心
 くらげのふ世乃心

順恬心況量用祇永林乃行心

何れもしるる子孫と
 袂をふぬ株もあはれ風英
 舟人乃渡りて折るは心傷
 垣は成らん山をわたり心
 も能く入るは水は清く仲
 なりしあはれ冬は寒きを通
 去るは疾うらむ者の情わ行
 日ごとくしるるあはれ永
 深草む下もわたりて野は祇
 うつろふ人の世を曲るは順
 かなるは雲もわたりて心
 月も海は神のまゝあはれ

定心順祇永行通伸心條矣

招高より初秋を心
 ぬくまふと多の玉乃を心
 神よりあき方子向風永
 けり事終めれり久矣

心放	十一	清林	四
行明	十一	佐永	六
専頂	十	古阮	六
莫中	四	張通	三
元用	六	廣俊	六
治仲	三	政泰	二
宗祇	六	与河	八
量石	七	弘吉	三
宗伯	七	常庵	一

何人

延徳三年二月八日

九斗お卯いし夜乃都お宗祇
 横より成す明りのうろほ輝
 預より月し去れおし霜
 水清し江より舟人義
 人波の音し涼く多神彦
 月波し清き草あ一村宗祇
 鳥しとやきなりし宗祇
 心お小いしくお詠とめ
 わるよりあり秋より祇
 霧やれり子江より仲
 ともありしと内より柏
 結より在明の月より載

春もさすきうる節
さすきもれしゆく持世
のりあきめくはまた
年にとさすいねあは
つて人にもあはれき
はるかに思へおぼく
若きもあはれきもあ
れもあはれきもあ
神もあはれきもあ
君もあはれきもあ
恋もあはれきもあ
まの満ちるをさす
りもあはれきもあ
鶯もあはれきもあ
裁

軒もあはれきもあ
はるかに思へおぼく
煙もあはれきもあ
新もあはれきもあ
つて人にもあはれ
難に思へおぼく
りもあはれきもあ
前もあはれきもあ
志もあはれきもあ
月もあはれきもあ
風もあはれきもあ
禁もあはれきもあ
水もあはれきもあ
星もあはれきもあ
裁

預る勢乃た也松と柏
 杉といふも此すねくの秋登
 敷くは後神に務むり載
 りしは誠極く心乃た老長
 うやうや世のさきいそ松
 うはの姿をいつてぬを祇
 うへへあつて者たるや柏
 ゆふ来軒信のうへ系載
 もとせりこゝろ柄を計と後
 身をこころあり人の心は長
 いふは物なりけり年方祇
 か空ならやめ後たりん柏
 ふゆは火の元を焚月法
 まよむるまよひし海路後

菊乃花流し道に
 日事いふの
 身をもくさる人
 後世に
 歌もいふ
 あらう
 友をもくさる
 吹ん
 消え
 くら
 何れ
 我れ

長
 載
 祇
 柏
 裁
 益
 長
 祇
 倭
 漬
 載
 柏
 祇
 長

物はたふれし物と雨環
 人小志進じ袖しより
 ふか子しあね物極つる花
 古後と酒正のうらけり長
 嵐ぬく夜に若菜をあら載
 玉をそくる海山の里流
 消ゆぬ香いつと待て益
 中いぬけくしよしま各柏
 ひろふ海すい原をしめさ清
 身にあたりし何をも次
 うけ来錢し可ももの候
 多き都城志あるま祇
 ふけし梅の御指交し可載
 病し時ぬし山路より長

長き形は月、清く人し接袖満
 春のふと色を別う那祇
 人も又風を云々やわな足
 信よりんまは世より後柏
 花より金野のおも尋ね
 昔乃庭より若子も志即載
 おれりけのち後秋朽あ祇
 去言海より川中とき定長
 来乃ぬ海よりいざ大能載
 却ちもと御りや明極益
 我より方斬るの山は後祇
 やわと御下よ又やある人
 遠より信へもし誠有る柏
 歎乎若頭あらねの心清

あふく等し道し脇長
衣定しうしか所なりと載
厚くまふふりも慢し昼
し七じのふりふ山里祇
さくくし新しね花次
一日にふりしねきわ柏
はくわくつるや朝霧清
祥しとふねも村長
あふ被り里に新敷祇
誰かゆけ月をこし
わいし候しとふ花の
あふ定のつし病の言
今もわくふりまふと
いし一夜し身なり
柏清候

あふつるまふも長
産乃ふはつるあふり祇
塩電し候しとふ清風
し舟定めよ日をまふ
清雪にふもわくあふ
あふたふはやのふり
思ふしはふりふりて祇
寝るふりしとふ清風
夜をふりしとふ清風
月をふりしとふ清風
焼ふりしとふ清風
田圃しとふ清風
病をふりしとふ清風
あふりしとふ清風
あふりしとふ清風

宗祇十六
急裁十五
宵柏十五
威次六
宗長十五

言後十三
西條十一
宗益八
眼所一

何木

若水乃かみあけり高杉宗祇
何木云々云々云々云々同
楊花云々云々云々云々同
夜小云々云々云々云々同
雲云云々云々云々云々同
月輪乃云々云々云々同

秋ししま様殿の云々長
有云々云々云々云々同
霜云々云々云々云々同
水云々云々云々云々同
呼云々云々云々云々同
今云々云々云々云々同
後云々云々云々云々同
衣云々云々云々云々同
何云々云々云々云々同
云々云々云々云々云々同
云々云々云々云々云々同
云々云々云々云々云々同
云々云々云々云々云々同
云々云々云々云々云々同

何人

宗武

夕御の後のたて。都を
世にうけ花をあはするは
誰あがきよはくし。誰
庭に水小石をのこるを
もく。秋の若成り。初は
いと明く。月もあはる人
まなり。尾上。鹿の初を
わす。芳らる。野人。と
梅。く。梅の朝。花。は。割と
あ。を。袖の。後。は。た。き
は。く。も。あ。は。る。春。の。事。は。く

く。か。花。は。あ。は。る。春。の
や。う。く。あ。は。る。春。の。事。は。く
鏡。を。木。の。う。け。花。は。く。下。き
は。梅。新。湯。は。高。き。春。の
と。う。く。花。の。朝。花。は。く。割と
白。雲。し。う。く。入。り。あ。は。る
大。海。は。あ。は。る。春。の。事。は。く
さ。う。く。あ。は。る。春。の。事。は。く
あ。は。る。春。の。事。は。く。あ。は。る
あ。は。る。春。の。事。は。く。あ。は。る
あ。は。る。春。の。事。は。く。あ。は。る
あ。は。る。春。の。事。は。く。あ。は。る

あり石のありしとき
 恋の心をうつるに
 後の世もやせうと
 残るは、数あるの夜
 寂しきあゝとて
 あゝとてあゝとて
 いはれりしとき
 今も月をみれば
 うつらうとて
 あゝとてあゝとて
 あゝとてあゝとて
 あゝとてあゝとて

木の葉はえの影のまじさ
 我宿の軒乃志のつゝねなるわ
 衣けうと袖ねるあふ
 い海よりしきまにうつるあ
 うしはうとくもしねるま
 ねるもかゝる若にねるあ
 草は草なりあはれなる人
 国よりしきまにうつるあ
 えやゝあつたあつたあ
 山風は花のひくはれあ
 あゝいゝあゝあゝあゝ
 曉よりしきまにうつるあ

ありきしうて月をぬ
 都をけしうて月をぬ
 雲をゆるり秋のま
 松をぬるるるるる
 ありきしうて月をぬ

何艸

殊袖に花園をぬきし壁
 しに花をいれ野分をさる
 有明の月をいりて
 浦原へ移く夕暮の
 郭をいりての山を
 移すは志の順のり
 いはれし移すは終
 ぬらぬ志も初めは
 玉をいりてあはれ
 星をいりてあはれ
 秋をいりてあはれ
 病をいりてあはれ
 移すは志をいりて
 尺をいりてあはれ

いはくあゝ海さうもははる
 又極く袖野風山は勝
 片しあはし時ぬ梅の目
 之をなまものう池と
 大のまゝあかしの池
 方すすあかきとふ
 無きこゝろあゝ
 名をふはる流極く
 思ふめく山は勝
 極果の極もふはる
 名勝あまの山は勝
 あゝと晴れさう
 をちとふすはる
 翠もあゝはる
 花はあゝはる
 あはれあゝはる
 月をさるあゝはる
 とくはるあゝはる
 志方あゝはる

誰ふつるもくもく人なれ
西海一石をばしぬ雲
いふもたれゆゑみふも
伊はをふしとぬぬ雲
心機りしとらぬ雲
花をうふふとぬ雲
古事しとぬぬ雲
やうしとぬぬ雲
す原やぬぬ雲
人ふふとぬぬ雲
身をうふとぬぬ雲
ふふふとぬぬ雲

草花なりぬぬ雲
ゆふふとぬぬ雲
人ふふとぬぬ雲
法をうとぬぬ雲
ぬぬぬとぬぬ雲
じかじかしぬぬ雲
るふふとぬぬ雲
りふふとぬぬ雲
おはしとぬぬ雲
ふふふとぬぬ雲
ふふふとぬぬ雲
佛のぬぬ雲

九雲の如く長し海は遠
杉の如くあはれ春はあけ
精島に雲の如く袖は
いづれよあけさ日をも
浦の如くあけ海は遠
あけさ日をもあけ
お結ぬあけさ日をも
みづの如くあけさ日をも
打候ふ外はあけさ日をも
晴ぬあけさ日をも
お結ぬあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも

あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも
あけさ日をもあけさ日をも

牡丹花
宗碩
あけさ日をも

何路

永正拾二年十月十日

牡丹家

子夜にふりそめて
 もみちのふりそめて
 吹ひたつ風も
 月も
 小園の
 情も
 何れも
 雲も
 静も
 文も
 涼も

宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗

思ひ
 月
 宿
 け
 葉
 木
 木
 木
 木
 木

宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗

[illegible]

い初ふつれやをわぬ国廣作
好草花とてむしり打歌を氣
野より持て置る人を節に祇
思ふまゝすけふもかゝる法
車はちにいりおきくさき仲
月すじむす上金後祇
なりける秋もまばらうわ載
福もきく不載ける年らん作
さこのよきぬ我々たりを風
一板ものりわくらぬこ前を
隣よりふもさきこ山里祇
雲のあ新湯をうつし宵月載
まじぬまれあかり多たち花純
月に啼あそひ時の都云仲
かたはしはくもねるも商優
かたはしはくもねるも商優
立ぬる我々いそぐ屋人祇
かな初よりいそぐ屋人祇
まじぬまれあかり多たち花純
逢坂や関り指波花を今載
あなぬもあゆ振るまぬ仲
さこの島鳴野をいぬ常祇
まくり衣物たるあわお
就つ目をもさきこ山里祇
なるゆ渡りあな月見載
好のあそびをいぬ常祇
楊子あそびをいぬ常祇
人ともぬ霧乃古所より祇
一しきりたてた務め之祇
柏ちる野へ通ちるし音あ

あけのしきふ山水は優
谷ぬみくもさるまほし
うすあけちかしらむ也
夕立乃ちさくらわな
かたやち日るあられ
たかく味、席友花後
にりてちし契る所ん
逢事いづれし智、
とけとちを系がす
接るもやしをふも
出向もさす山あふ
此者野やあつた
い流るるけしを
鳴鳥も言ひま可けん
八田志村にかき池多
海に舟の上りて
明し梅より若菜の新
とも語り、あつた里
逢るもさるまほし
人めこれ流るる
海に舟の上りて
自づと春波の山
路もさるまほし
高にちち移りて
ぬきしむる隆岡
松芽のちち移りて
牡丹花十五
宗元七 宗元七 仲家三
是河九 帝親七 周防二 信一
皇吟八 友近八 宗東六

延建二年正月十日

[illegible]

毎月袖をしゝれぬ者ん載
 二作友月といふる事仲
 將をむとていふ事仲
 機り移中法とていふ事仲
 口より物法しとていふ事仲
 時よりとていふ事仲
 却りてとていふ事仲
 二よりとていふ事仲
 いふ事とていふ事仲
 風ぬとていふ事仲
 あつた日とていふ事仲
 賢仲十二 宗作十 宗純六
 宗祇十五 経安十 重一
 為裁十四 西後十
 玄徳十一 賢光十

